

大相撲と世界杯ラグビー

新井 宏

9月22日 大相撲九月場所千秋楽

9月22日、久しぶりに晩酌しながら大相撲九月場所千秋楽のテレビを見ていた。まだ時間は五時半、六勝の栃の心と九勝の豪栄道の両大関の対戦中であった。これから横綱が登場するのだろうと見ていると、どうやらそれが結びの一番らしい。

確か横綱が二人いたはずだが、ともに休場したようで、しかも二人の大関も優勝には絡んでいない。この段階で決勝戦に進んだのは共に関脇で十二勝の御嶽海と貴景勝で、珍しいことであった。

いつもなら優勝争いにはモンゴル出身の力士が並ぶ。しかし九月場所は、白鵬と鶴竜の両横綱、大関の逸ノ城が途中から休場、大翔鵬がなんとか九勝を挙げたものの、玉鷲も東龍も散々の成績であった。

そんな状況を見ながら、気づいたのは、優勝決定戦に進んだ御嶽海も貴景勝も典型的な「アンコ型」の力士で、お腹ばかりでなく胸部さえ出っ張って垂れ下がっている。おそらく世界中の格闘技でこんなに太っているのは

「日本の力士」だけであろう。わずか直径四・五メートル（昭和初期までは約四メートル）の土俵では「押し相撲」が基本となるので、重心を低くし体重を増やすのが理にかなっている。だから、無理をしても「ちゃんこ鍋」を食べて、体重増を図る力士が後を絶たない。いわば人為的に造られた畸形である。

しかしモンゴル系の横綱は同じような環境にありながら典型的な「アンコ型」にはならず、むしろ「ソップ型」（アスリート型）に近い体形を維持している。体質によるのであろうか。

優勝決定戦に進んだ両関脇と共に、モンゴル系四横綱（朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜）やハワイ系四力士（高

見山、小錦、曙、武蔵丸)、ついでに江戸期から平成期までの横綱の平均身長と平均体重およびその肥満度を較べてみる。

| グループ | 身長(cm) | 体重(kg) | 肥満度 |
|------------|--------|--------|-----|
| 貴景勝・御嶽海 | 一七七 | 一七二 | 五五 |
| モンゴル四横綱 | 一八七 | 一四七 | 四二 |
| ハワイ系四力士 | 一九四 | 二三三 | 六二 |
| 江戸期横綱(10名) | 一七九 | 一四二 | 四四 |
| 明治期横綱(10名) | 一七七 | 一三一 | 四二 |
| 大正期横綱(9名) | 一七七 | 一二〇 | 三八 |
| 昭和期横綱(31名) | 一八二 | 一三八 | 四二 |
| 平成期横綱(10名) | 一八八 | 一六六 | 四六 |

両関節の身長がモンゴル系横綱よりも十センチも低いのに体重が二十五キロも多く、肥満度で示すと五十五と四十二で大差がある。肥満度とはキログラムで示した体重をメートルで示した身長の自乗で割った値である。

それでは、日本の力士は昔から「アンコ型」が多数を占めていたのであろうか。

単純に言えば、江戸期から昭和期中頃まで、日本の横綱の身長は一七七センチほど、肥満度も四十二前後で、ほとんど変化していない。

身長・体重そして肥満度に変化をもたらしたのは、

明らかにハワイ系であり、モンゴル系は身長こそ十センチほど高くなったが、肥満度は日本の力士と変わらない。

ご承知のように、近年の大相撲は、外国出身力士が優勝をほぼ独占していて、日本人の横綱が優勝したのは、貴乃花の二〇〇一年五月場所以来、二〇一七年三月場所の稀勢の里の一回だけである。

結局、重量級のハワイ系力士の登場で、身長・体重に劣る日本力士達は「アンコ型」を増やして対抗することになったが、その後の長身「ソツポ型」のモンゴル系の登場で、ますます「アンコ型」に走り、技の相撲が廃れる流れを生んでしまった。

それにしても、格闘技では、柔道、空手、テコンドー、レスリング、ボクシングなど、オリンピックに採用された競技は例外なく重量階級制が導入されている。それだけに「重量級」が有利なのは当然であるが、これらのスポーツで「アンコ型」の選手など見たことがない。むしろ体重を引き締めて、軽量級に廻った方が有利なのが常識だからである。したがって、もし相撲にも重量階級制が導入されたなら「アンコ型」は激減するであろう。

乱暴に言えば、基礎的な身長・体重に劣る日本人が相撲の世界で生き残るためには、重量階級制を導入して、世界の格闘技に仲間入りすることが不可欠なのではなからうか。

9月20日〜10月13日 世界杯ラグビー予選

実は、このように力士の体型のことを考えていたのは、九月二十日から始まった世界杯ラグビーのことを意識していたからである。

相撲もラグビーもその基本に「押し」がある。「押し」に「重量級」が有利なのは当然であるが、そこには華麗な「わざ」も必要である。フランスのラグビー選手達が大相撲の稽古場を訪問し、押し相撲や四股踏み、足技などを観察したという。良い着想だと思う。

九月二十日、開会早々行われた日本対ロシア戦は、開始直後に格下のロシアに独走トライを許し七点を奪われる展開で、やはり外国は強いとの思いが先立った。しかし素人目でも、日本の方が優勢に見えるのである。

どうやらフワード八名による「セットスクラム」や、野戦での「ラック」とか「モール」と称するボールの奪い合いでも「押し相撲」が主役で、押し勝ってボールを得た側が試合を支配する。特に「セットスクラム」は「押し相撲」の団体戦の様相で、日本が完全に押し気味で、じりじりとロシア陣内へ攻め入っている。

ラグビーではタックルされ倒れた選手はボールを離さなければならぬ。その結果、地上に転がったボールの上で臨時の「スクラム」を形成して押し合うのが「ラッ

ク」である。また「モール」は、タックルされても倒れない限りボールを保持できるので、味方の選手がそのま前に押し込む方法である。ゴール前の混戦でしばしば見られる。そんなルールや見所を少しづつ学んだ。

いずれにしても「押し相撲」が優勢なら、常にボールをキープしながら前進できる。だから素人でも対ロシア線に日本が優勢なのがわかる。結局、七点先行されながら、結果的には三十対十で大勝した。

ラグビーの華やかさは、パスやキックに続く独走トライであろうが、いわば「押し相撲」に負けさえしなければ、確実に前進してトライを積み重ねることができるよ

うだ。したがってラグビーには「番狂わせ」が極めて珍しいのだという。「押し相撲」なら、技もあろうが、力の強い方が何回やっても勝つ。対ロシア戦を見て、やっとならぐビーの見所が判った。

ところが、九月二十八日の日本対アイルランド戦で、その「世紀の番狂わせ」が起きたのである。つい先日まで世界一位だったアイルランドに九位の日本が挑むが、早くも前半二十分には十二対三と先制されてしまった。常識的には逆転など既に絶望的な場面である。

しかし試合が終了してみれば、アイルランドは、その後の六十分間、全く得点ができず、十二対十九で日本が勝利してしまった。失点が無かったということは、日本

が「押し相撲」で優勢であったため、相手に攻撃のチャンスがなかったということである。

9月26日 シラク元フランス大統領逝去

ちようど九月二十八日の対アイルランド戦の頃、シラク元フランス大統領が九月二十六日に八十六歳で亡くなったとのニュースが入った。シラクは愛犬に「スモウ」と名付けるほどの大相撲のファンである。

一九七二年以降、主要閣僚や首相、パリ市長を歴任しながら遂に一九九五年、三度目の挑戦で大統領になり、以降十二年間の政権を担当した。四十回以上来日、一九九五年十月には大相撲パリ公演を実現し、二〇〇〇年には「フランス大統領杯」を寄贈してくれている。

幼少期にパリの東洋美術館やギメ美術館を観覧し東洋美術に関心を持ったのが日本への関心の始まりという。学生時代に『万葉集』を読み、その後も遠藤周作など日本文学を愛読し、駐日大使館の重要な任務の一つは、エリゼ宮に大相撲の結果を毎日報告することだったといわれる。いわばシラクは典型的なジャパノロジストと言ってもよいであろう。

一番の鼻肩の力士は琴錦と伝えられているが、身長一七七センチ、体重一二〇キロで肥満度は三十八、強豪力士としては典型的な「ソツポ型」である。勝手な想像で

あるが、美意識の高いシラクが「アンコ型」を鼻肩にしたとは思えない。

シラクが相撲に興味を覚えたのは、多くのジャパノロジストと同様、印象派に多大な影響を与えた「浮世絵」を通じてであろう。

江戸末期、一枚の「浮世絵」が一杯の「掛け蕎麦」の代金と言われ、輸出陶磁器の緩衝材として詰められてヨーロッパに大量に持ち出されていた。その過程で、写実化して行き詰まっていたヨーロッパ絵画、特に「印象派」に、浮世絵の色彩の美しさや輪郭を細線で表示する手法、遠近法を無視した手法、デフォルムした表現などにより、影響を与えたのだと言う。

日本では大衆文化であった浮世絵は、美人画、役者絵、名所絵、春画などあらゆる分野をカバーしているが、相撲絵もその大きな部分であった。マネの「エミール・ゾラの肖像」の背景に、相撲絵が描かれている。

化粧まわしを締めた人気力士の錦絵は、相撲特有の「アンコ型」をかなりカモフラージュしており、畸形としての違和感はあまりない。しかし、シラクの政敵サルコジ元大統領は「相撲は知的なスポーツではない」と言って切り捨て、二〇〇八年に大鵬に優勝杯を授与したのを最後に、「フランス大統領杯」を廃止してしまった。

心の狭い人物のように思うが、相撲絵の畸形「アンコ型」を本能的に嫌ったのである。しかし日仏間の政治

的な問題としては一年後に「日仏友好杯」として復活している。

9月26日 クルップのドクター・クレンケ

ドイツのドクター・クレンケもジャパノロジストで相撲ファンである。風貌がカラヤンそっくりで、長らく製鉄都市ジーゲンのクルップ製鉄所の所長を務めていた。ドクターと言っても工学博士ではなく理学博士でありドイツでも異色の人物。

私が初めてお会いしたのは、一九七七年九月、勤務していた会社から、ステンレス鋼製造技術交流のためクルップ製鉄所などに一ヶ月ほど派遣された時であった。その頃、日本の製鉄業は粗鋼生産一億トンを超え、いきなり世界第一位に躍り出ていた。ステンレス鋼も例外では無く、日本の年産は二〇〇万トンを超え、世界の生産量の三分の一を占め誠に意気盛んであった。技術交流とは言っても、こちらが学ぶだけでなく交流先も大歓迎してくれる状況であった。

ジーゲンの製鉄所は一八四五年に設立された歴史ある工場。十五万坪ほどの敷地に古い平炉がまだ残っていたが、ちょうどその頃、近代的な一五〇トン電気炉に置換された。

製鉄所の向いにある七階建ての事務棟には、広い所長

室があり、最上階が幹部職員のレストランになっていた。その一室でクレンケ所長以下五〜六名の関係者に歓迎を受けた。

会食中に、お酒も入りドイツやハブスブルク家の歴史のことで、識っている固有名詞を並べ立てて話したら、かなり通じたようで、びっくりした顔をされた。ドイツ人の技術者が日本に来て、豊臣秀吉や徳川家康の能書きでも言ったら、驚くような感じだったのかも知れない。その時、物静かなドクター・クレンケが一般の工学博士よりも一ランク上の教養人という印象を受けた。

ドクター・クレンケに二度目にお会いしたのは、一九八七年北欧に出張した途中で、ジーゲン製鉄所に立ち寄った時である。私の職場も生産管理部門から研究部門の責任者に替り、ステンレス鋼の溶湯から直接鋼板を製造する夢の技術をクルップと共同開発中で、交流も盛んで友人も多かった。

ちょうどその年に私も博士号を採り、その論文コピーをドクター・クレンケに紹介した。純粋な理論論文で、一般的な技術者には馴染まない内容であったが、さすが理学博士だけあって、有益な討論をして頂けた。

そして最後にお会いしたのが一九九七年九月のことである。最初にお会いしてから既に二十年、もちろんその頃には現役を引退されていた。私はまだ現役であったが、仕事の関係でお会いしたのではない。

私の趣味は考古学研究である。その中でも古代尺の復元研究は長年取り組んできており、既に歴史考古学の著名な出版社・吉川弘文館から『まぼろしの古代尺』という研究書を出版していた。その関係で、五年に一度、開かれる国際計量史学会には極力出席していた。一九九二年には第五回の学会がフランスのルール大学で開かれ、妻と一緒に参加した。

その五年後、一九九七年には第六回の国際学会がドイツのジーゲン大学で開かれた。

ジーゲンは歴史的な都市とは言え、人口は十万人の中小都市であり、ジーゲン大学も一九六四年創立、学生数二万人弱のドイツに四百ほどある大学の中のひとつに過ぎない。その旧知の地を訪れるということは、私にとっては奇跡ともいえるべき偶然であった。しかも大学の位置するところがクルップ製鉄所に隣接する小高い丘の上、ジーゲン大学の展望塔から見下ろすと、その真下にクルップの製鉄所が見渡せる。

更には、大学周辺の丘陵地には新興住宅地が広がり、潇洒な平屋建てのドクター・クレンケ邸が、製鉄所を見下す一角にある。いわば隠居した城主様がクルップ製鉄所を見下ろしながら生活している風であった。

国際計量史学会は三日間の日程で行われたが、初日にはジーゲン市長による歓迎会が市役所のレセプションルームで開かれた。画家ルーベンスの出身地であり、壁面

には美術館のように彼の絵が展示されていた。

選挙でもあるのだろうか、市長の長いスピーチがあったが、遠路の参加者に敬意を表してか、日本とかドクター・アライとかの言葉も聞えた。しかし夕食会は学会持ちのようであった。

二日目には、講演の合間に二時間ほど時間が空いたので、公衆電話でドクター・クレンケに連絡をして見た。住所が判っていたので、妻と一緒に十分ほどの距離を少し迷いながら歩いて行くと、ドクター・クレンケが奥様と一緒に入口まで出ていてくれた。

突然の訪問であったが、城下町を見下ろしながら、昔の写真などを見て旧交を温めた。リビングには壁面に飾り物が多く掛けられていたがジャパノロジストらしく、浮世絵や焼き物も混じっている。

びっくりしたのは、その時、日本の大相撲のことが話題になったのである。聴けば、毎日衛星放送で大相撲の放送をみているとのこと。その日は一九九七年九月二十六日、後で調べると九月場所の十四日目で横綱貴乃花が十八回目の優勝を遂げた年であった。秋場所が始まったのも記憶になかった位、大相撲に関心のなかったもので、一方的に話を聞くだけ。とにかくびっくりしてしまった。

10月20日～11月2日 世界杯ラグビー決勝

今回の世界杯ラグビーが始まる段階では、世界十位以内は、ニュージーランド、ウェールズ、イギリス、アイランド、南アフリカ、オーストラリア、スコットランドなどのイギリス連邦国ばかりで、二十位以内にも、人口八十万名のフィジーや二十万名のサモア、十万名のトンガなどオセオニアのイギリス連邦島嶼国が入っている。更に二十五位以内にカナダや香港もある。まるでその他の参加国は、英連邦大会に庇を借りている雰囲気である。しかし、なぜかアジアのイギリス最大植民地、インドやパキスタンの姿はない。

その中で、日本が初めて八強入りをした。だからそのことだけでも世界では奇蹟とみなしているらしい。

英連邦諸国でラグビーが盛んなのは、イギリスの植民地政策によるものだとの話も聞いた。スポーツが外交と密接な関係を持つのは、日中のピンポン外交や北朝鮮・韓国の冬期オリンピックなどにも例がある。

決勝リーグが始まり、その初戦は日本対南アフリカであった。前半は三対五と大健闘したが、予選リーグで見た日本の強力な「押し相撲」が完全に押さえ込まれている。後半は為す術もなく〇対二十一、これが実力なのだと認識せざるを得なかったが、敗れてもとても心地よい試合であった。

昭和五十六年春のこと、南アフリカの鉄鋼会社サザン

クロス社から六名ほどの従業員がステンレス鋼の特殊熱間圧延機の操業実習のために筆者の勤務する製造所にやって来た。

クロム鉱石の豊富な南アフリカで、ステンレス鋼を製造する計画が進んでいて、その主力の圧延機に熟練操作を要するステッセル式可逆式圧延機を導入するためであった。

たまたま、操業指導を担当した関係で、南アからの派遣者に加え、こちら側で実地に指導を担当したオペレーター等合わせて、十数名が我家にやって来た。

南アは英語の国とのイメージがあったが、体格の良い操業者達は、先住オランダ系アフリカーナのように、英語は片言、専ら飲んだり、(無理に教えた炭坑節などを)一緒に踊ったりの交流、ドンチャン騒ぎであった。

その時に土産に貰った南アの美しい写真集を探すが、どこにしまったか思い出せない。ただ、木製の黒く焼いたペーパーナイフは今でも重宝している。

南アフリカの選手達の中に、デクラークと言う遠目には女性と見まがう金髪ロングヘアーの九番スクラムハーフがいる。身長一七二センチ、体重八八キロと小柄、スクラムには参加はしないが、そばにいて、かき出されたボールをバックス陣にパスをする役回り、南アのチームでは司令塔である。肥満度は三〇。とにかく素人目に

も上手いのである。「小さな巨人」と称され、昨年度のプレーヤーオブザマッチ(POM)にも選ばれたとか。ちなみに、南アのチーム平均では、身長一八六センチ、体重一〇三キロ、肥満度三〇である。

その後、南アは対ウェールズ戦を十九対十六、対イングランド戦を三十二対十二で勝ち、遂に三度目の世界杯一位に上りつめた。いずれの試合も「押し相撲」にばかり注目して見ていた。日本はその南アフリカに負けたのだから仕方がないという妙な納得がある。

11月24日 大相撲十一月場所千秋楽

早くも、大相撲十一月場所が巡ってきた。この間、大相撲と世界杯ラグビーについて、時折メモしておいたものをまとめて『まんじ』の原稿にしようと考えていた。何やらスポーツ音痴の観戦日誌になりそうである。

しかし、そのお陰で我が人生のささやかな「思い出」を楽しむことも出来た。人生なんぞ、力まなくとも、平凡な楽しみは日常の中にある。

さて、十一月場所は福岡開催、またも千秋楽までテレビで観戦することもなかった。慌てて千秋楽を見る。

白鵬が一敗を守り断トツの成績で、貴景勝は六敗、御嶽海も九敗の散々な成績であった。

翌日の新聞には「押し相撲の興隆・縮まる力の差」とある。「押し相撲の興隆」とは、褒めた言葉とは思えない。「縮まる力の差」とは、休場を除く三十九名の内、六勝、七勝、八勝の力士が二十四名もいて、ドングリの背比べだということである。「アンコ型」力士間の対戦では、一方的な勝利には結びにくいと言うことだ。

そこで思った。やはり「アンコ型」は駄目だ。歴代の最強横綱を見ても、双葉山は一八〇センチ、一三五キロで肥満度は四十二、千代の山も一九一センチ、一一五キロで肥満度は三十二で「ソツポ型」である。

重心を下げることの出来る「短足」が有利と思っていたが、体重まで考慮するとそうでもない。

そもそも身長に恵まれない日本人が「ちゃんこ鍋」を食べて、体重を増やして「アンコ型」になるのは、健康志向の現代常識から言えば「犯罪」に近い。横綱経験者の平均寿命は六十二歳で著しく短命と聞く。

やはり「重量階級制」を導入して「アンコ型」を排除し、相撲を「知的なスポーツ？」にすることが時代の方向であろう。「フライ級横綱」が誕生すれば、アマチュア相撲がもつと興隆するかも知れない。